

その他

不拔の精神で

苦しみに耐え生還

福岡県 大内田 定 夫

昭和十九年十月五日、広島西部第六部隊に現役兵として入隊しました。昭和十九年十一月ころ、正確な日時は記憶していません。下関に集結して翌日同港を出航、朝鮮の釜山に向けて航行、玄界灘の大波と船酔いに悩まされながら、蚕棚のような狭い輸送船に詰め込まれ、しかもいつ遭遇するか分からぬ敵潜水艦の脅威に晒されながら漆黒の闇の海を潜り抜けるようになって、薄闇の釜山港に無事入港することができました。

上陸後、貨車輸送で五日間、退避、発車を繰り返しながら満州の牡丹江省の石頭という所に着き、西部第一〇七部隊に入隊しました。

兵種は野砲兵でありました。訓練も二週間くらいは受けましたが、旧疾患である関節炎が悪化して牡丹江陸軍病院に入院することになりました。その病院も次々と移転しましたが、大連に関節炎に効く温泉病院があるとのことでした。そこで温泉療養を受けることになり転院しましたが、その直後、終戦宣言を聞くことになりました。

終戦後、ソ連軍の俘虜となり、行く先不詳のまま貨車に乗せられ、それは帰還につながるものだと希望的観測を先走りさせながら走っていたのです。開拓団から来た人たちは帰れるものと早合点して帰り支度を急

いでいました。

私たちは夜暗くなつてから貨車に詰め込まれ、目的地は不明のままどこかへ輸送されていきました。その後、黒龍江を渡河、下車した後、四キロくらいを徒歩の後、元何かの収容所にも使用していたような粗末な建物群の中に押し込まれ、ここで一泊することになりました。

希望から一抹の不安へと我々の気持ちは一転して、暗闇の幕にとざされていったのです。昼間はほとんど歩かされ、どれくらい距離であつたかクタクタに疲れてやっと辿り着いたのがソ連領テルマという部落であつた所でした。

ここに一応落ち着くことになり、それぞれ割り当てられた部屋に落ち着くことになったのですが、その後ソ連兵の指揮者は捕虜を一カ所に留めておかない方針らしく、転々と場所を変えるので、その都度労力を要し、体力を消耗するのです。

捕虜収容所は急造の板張りの部屋であり、その周囲を有刺鉄線で四角に囲い逃亡を防いでいます。シベリ

アの冬は想像を絶するものであり、常に死と隣接しています。

いくら寒くとも、苦しくとも、働かねばならない、労働に追い立てられ疲労と戦いながら毎日のノルマを果たさねばならない。それでも労働条件に基づき温度が一定の温度、零下何度以下に降下すると労働は中止となり、保温の措置が取られるのです。保温と言っても体温が発散しないような自己保温方法をとるだけです。体温が一定温度に上昇するとソ連兵の号令により作業開始です。

作業の内容は主として石炭運搬、その他雑多なものでした。働く上で最も問題になるのは、食糧であるが大豆、高粱、大豆の絞り粕などで、しかも精白したものでなく、丸い粒のままであり、それを釜で煮沸して食べるのです。人間の食べる物とは程遠いひどいものでした。それが昼食の弁当である。私たちはどんなにひどい食物でもまず食べる物があるだけでも幸いだと観念して、何よりも生命を永らえることが第一と考え、苦しい思いで我慢して食べました。

作業を終わり収容所に帰ると食事券の配布がある。

三段階に区別された食券と引換えに夕食の黒パン、八〇グラム、一〇〇グラム、一二五グラム、の支給を受ける。ノルマによって待遇に格差が付いているのです。

入浴は夏は隔日おきであるが、ただし、入浴といってもお湯は洗面器一杯くらいで風呂という代物ではない。これは夏の入浴で、冬は一週間に一回くらい体を拭く程度であり、とてもこれで清潔を保つことはできませんでした。

体の不潔を少しでも防止するために、ソ連人の衛生兵らしき係員と女性看護士が二週間に一回、陰毛を剃り落としてくれました。女看護士が剃毛のため局部に接触しても、衰弱してヒョロヒョロの体力では何の感情も起きなかったのです。それどころか毎日毎日俘虜の悲惨な死骸の処置を交代でしなければならなかったのです。

冬はカチカチに凍った死体を別棟の倉庫に置き、何日かして纏めて焼却するのです。夏は早目に処置をしなければならぬ。暗い希望のない毎日の中にも一週

間に一度は休暇をもらい演芸会を開いて慰め合っていました。奇るとさわると食物の話と帰還の話ばかりであり、ついには遠い故郷の思い出に走るのです。

そのようにして暗い希望のない毎日を送っていると、ついに帰還命令が出ました。茫然としてしばらく声も出なかつたものです。帰還の選定は、一収容所十人くらいの中から十人くらいでした。健康を害した病弱者を優先させたくない。詳細は我々には不明でした。

昭和二十二年の暮れ、ナホトカに集結、六千トン級の貨物船に乗せられ港を出て、十日間を要して日本の舞鶴港に入港上陸することができました。

帰るまで帰還の真偽を信ずることができなくて非常に不安でありましたが、夢に見た日本の山や海を見て溢れる涙と共に帰れたという実感が胸にあふれてきました。

あの苦しかった収容所時代の思い出をかみしめてみて、あの苦しみに耐え、必ず生きて帰るぞという不拔の信念があつたから今日の自分があつたのだと思うと、共に今日あらしめた収容所の人たち、その他の人々に

感謝の念を捧げ、老後の自愛をお祈りします。

特攻基地、比島戦末期

戦犯未決収容所

静岡県 山本春彦

私は関東大震災から二カ月も経たない大正十二年十月八日、元熊切村（現周智郡春野町）の岩田家の三男として生まれました。父は農林業で杉、檜の植林、椎茸栽培などをして生計をたてておりましたが、兄は既に現役兵として出ていました。当時農家の次、三男は都会で働く者も多かったのですが、既に戦時中でありましたので、熊切村で三名軍隊に志願せよということでした。

私はその頃、肺門リンパ線という病気で三年半、ようやく全快して間もない時でしたので、当然採用されなれないと思っていましたし、勤務をしながらもまた病が出てはいけないと気を遣っていました。

ある日の夕方、青年学校で「この中で死んでもいい者はあるか」と言われ、私は軽く手を挙げました。「熊切で三名割り当てられている」という状態です。今思えばとんでもないことだが、まあ当時は当然だったでしょう。志願の書類は、自分で一字も書かないのに、青年学校の指導員が全部書いたのです。これではほとんど断われない。合格になるか不合格になるか分からないが、自分としては病み上がりの時だったので成り行きに任せることとなりました。

検査は隣の森町（遠州）で行われたのですが、結果は「乙種合格」となりました。試験は体格と学科でしたが、胸部はだいたい良いと医務の先生から言われていたので、自信は取り戻せました。

昭和十八年五月一日に家族や部落の人々に万歳で送られ、志願兵だけの列車で袋井駅から東海道線の藤沢で民家へ分宿しました。仲間は海兵団行き志願兵だけでした。食事は軍からの食料を回してあったのか腹一杯、食器も海軍のものでした。軍官民一致で、民宿は一つの商売のように慣れたものでした。